あゆみ通信

VOL. 189
あゆみの会(真宗大谷派大阪教区第2組同朋の会推進員連絡協議会)
会　長　細川　克彦
広　報　本持　喜康

新年のご挨拶

会長 細川　克彦

新年あけましておめでとうございます。

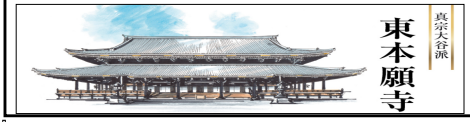
昨年元日には能登半島沖地震が起こり、多くの方々が亡くなられました。心より哀悼の意を表します。また被災された方々には、かっての穏やかな日暮らしが一日も早く回復されることを願っております。

さて、本年4月には大阪教区において「宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要」が勤まります。私ども第2組からも団体参拝が行われます。

宗祖親鸞聖人の御誕生は私にとってどのような意味を持ち、また浄土真宗の開顕を私はどのように受け止めているのかと改めて考える大事なご縁をいただきました。

思えば縁あって、推進員教習を受け推進員にさせていただいたことの大きさに心動かされます。そのご縁があればこそ仏教に、また浄土真宗に出遇わせていただきました。極めて稀なことではなかったかと思われます。

しかし、聞法をさせていただきながら、なにか肝心なことを受け止めていないのではないかと思うこともあります。これからも皆様と共に聞法に勤(いそ)しんでまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。合掌。



あゆみの会総会 開催

2024年12月15日(日) 午後1時30分から天王寺区の南照寺(友澤秀三住職)をお借りして、あゆみの会総会が開催され、11名の会員が参加しました。

第2組から、池田英二郎副組長(宗恩寺住職)にご出席いただきました。

恒例により、事務局の本持が進行を勤め、真宗宗歌で開会。挨拶を細川会長、第2組から池田英二郎副組長にいただき総会議事に入りました。まず事業報告と事業計画を吉田雄彦副会長(法山寺)が、会計報告と予算案を本持が行い、監査報告を、細川孝子監査委員から行われ、参加者の拍手で承認いただきました。

休憩後、講師の友澤先生から、「浄土真宗は仏教である」と題してお話をいただきました。

先生が若い頃に熱心に聞聴されていた和田稠先生の「浄土真宗は世界に開かれた仏法であります。仏法と言うより、人々を世界に開かれた解放する教えです。浄土真宗は仏教でなくてもいいのです」」と言う言葉を受けてのテーマだと話され、また大阪教区の「南御堂」誌(2024年11月・12月号掲載)の巻頭で紹介のキリスト教信者の言葉「仏教は、キリスト教とは対極的で知

親鸞のことば

変わらず私を照らし続けてくれるもの

煩悩こまなこさえられて
摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて
つねにわが身をてらすなり

高僧和讃

阿弥陀さまの慈しみの心を「大悲」と言います。それは親不孝者の息子を、ひたすらに愛する親心のようなあたたかさを秘めています。

私たちは悩みや問題にさらされると、愚痴や不満ばかりを漏らすようになります。その時、自分がいかに恵まれているか、いかに愛されているかをつい忘れてしまいます。しかし、阿弥陀さまはそんな私のもとにも惜しみなく光を届けてくれるのです。どんな状況にあってもやさしく見守り、そしてこれからも照らし続けてくれる。そのような気付きを他力の信心と言います。

。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

あけまして　おめでとうございます

昨年は、あゆみ通信を支えていただいてありがとうございました。今年も、変わらずよろしくお願いいたします。

年賀状の代わりに、ご挨拶とさせていただきます。

新年を迎え、あらためて仏弟子となった本山の御影堂で、宗祖親鸞聖人の前で誓った約束を思い出し、いただいたいのちを大切に、共に歩んでいきましょう。

今年は、大阪教区の宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要が行われます。それにちなんで、2025年は「慶讃法要YEAR」で、数々のイベントが催されます。都合のつかれる方は、ぜひご参加くださいますように、お願いします。今年も、「あゆみ通信」を、細川さんに助けていただきながら、編集していきたいと思います(本)

的な人、強者にはふさわしかろう。だが、私は弱くイエスなしには生きられない。イエスや「弥陀の誓願」は、そのような人びとの真の救いではあるまいか」を紹介されながら話されました。
法話をいただいた後の座談では、先生のご法話に質問や意見が出て、聞法を新たなスタートとして進むことを確認して総会を終了。恩徳讃で閉会しました。

合同報恩講執行

2024年11月21日(木) 午後4時から、阿倍野区の即應寺(藤井真隆住職）において、今年最後の仏事である第2組合同報恩講が、組内の住職や坊守、寺族並びに門徒・推進員38名が参加して、厳かに勤まりました。

冒頭、組内の住職方による出仕で、勤行は正信偈(真四句目下）、念仏(淘三）、和讃(弥陀大悲の誓願を）、回向(願以此功徳)を、全員で声高らかに勤めました。

続いて越本達了先生（第5組専光寺）を講師に、講題「聞法は死の準備ではなく、生の糧である」でお話いただきました。

先生は、聖教の言葉をはじめ、蓮如上人の「御文」、そして恩師である本田惠先生や廣瀬杲先生・和田稠先生の言葉を紹介されながら、報恩講について話されました。

恩に報いると言うことは、阿弥陀さんや親鸞さんの前にひざま付いて、一年の出来事を報告する。それに対する阿弥陀さんの呼びかけを聞く。それが聞法ではないかと。聞法と言うのは、それぞれの生活の中で「それでええんか」

(厳しさ・智慧）と「よく頑張って来たなあ」(優しさ・慈悲）と言う呼びかけを聞いていくこと。そう言うことが報恩講の大切なことではないですかと話されました。

恩徳讃で終了後は、お斎をいただきながら、歓談。ひと段落して、吉田雄彦氏(法山寺門徒)の進行で、同朋総会が開催され、第2組の仏事について、門徒や住職から発言があり、最後に墨林組長から意見をいただき、終了しました。

如是我聞

越本先生法話聞書

佛足寺　細川　克彦

先生は、はじめに真宗門徒にとって1年間とは報恩講に始まって、報恩講に終わると言う独特の生活習慣があると。

報恩講の時期になると、私にとってどんな1年間だったとかと阿弥陀さまに報告するとき、無数の恩をいただいていたことが知らされる。
阿弥陀に慈悲のはたらきを表す観音菩薩は「1年間よくやって来たね」とやさしくおっしゃって下さり、また「それでよかったのか」と、智慧を表す勢至菩薩の厳しい声が聞こえてくるのではないか。

阿弥陀さまの別名である「両足尊」とは、そういう二つの声を聞いていくことの大事さを伝えているのではないかと。

後半のお話では、かってあるお寺の掲示板に「父います、西の国　母います、西の国　私もそこへ帰る」と書かれていて、心に残ったと。そこに頷けることが信心ではないかと。

大推協通信

真宗本廟おみがき奉仕団　募集

2025年3月2日(日)～3日(月)

真宗本廟の内陣に荘厳された、普段は触れることの出来ない貴重な仏具のおみがき会に、大推協で団体参加をします。ご一緒に参加しませんか。

期日　2025年3月2日～3日（1泊）
募集人員　10名
内容　おみがき、お話を聞く、語り合い。
申込期限　1月22日（水）
冥加金8000円（大推協より助成済）
他に米1.2Kg（または800円）
問合せ先
細川克彦(Tel:06-6779-5349)

かって学ばれた教学研修院で、本多恵先生から広瀬杲先生があるところで書かれた色紙をご覧になったお話を聞かれたことについて話された。
「ひとたびの生命なりせば
いとおしみ、いとおしみつつ　今日も生きなん」

その色紙は病室で、ほとんど植物人間に近い状態で入院しているかっての生徒を見舞われて贈られたものであると。

和田稠先生から「いのち」の「い」は息のことであり、「ち」は不思議な力を意味すると教えられたことがあるが、廣瀬先生は、そこに感じられる、生きていることの温もりに手を合わせて居られたのではないかと。

覚如上人も、『御伝鈔』で、親鸞聖人の最期を「念仏の声ではなく」、「念仏の息たえましましおわりぬ」とおっしゃっている。

また、「恩徳讃」に「身を粉にしても報ずべし、骨を砕きても謝すべし」とあるが、世間で言う「粉骨砕身」(がんばる意）とはちがう。
「身を粉にしても、骨を砕きても」と言うのはお骨の姿ではないか。

ある先生が、「恩徳讃」のことを、「一生を尽くして」と言う意味であると教えてくださっていることを考えて欲しいと結ばれました。